〈はじめに〉

このお話は、子どもにとって身近で、興味深い動物たちの名がたくさん出ます。話の筋も簡単で、初めて試みる人にとって最適といえます。さて、お話を始める前に、注意して頂きたいことがあります。それは子どもに話を聞くのを強いてはいけないことです。子どもの気持ちや状態を良くみて、聞きたがっているかどうかを見極めてから始めでください。話し方は、かけ声、身ぶりを惜しまず、繰返しを大切に。漢字はカードでさりげなく示します。あるいは話の前に、「これはお鼻の長い動物」などと主役の五匹の漢字を見せ、興味を持たせてから始めてもいいでしょう。話のあと、漢字を示して読ませてみますが、たとえ間違っても決してとがめてはいけません。ひとつふたつ読めたら大成功です。大いにほめてあげましょう。提出できる漢字は「森、象、熊、兎、狸、猿、野原、山、川、鬼、鳩」などですが、もちろん最初から全部示さなくても結構です。

それではこれからお話をしましょう。

あるところに森がありました。この森の中にねえ、いろいろな動物が住んでいましたよ。こういう動物、知ってるかな？　わかるかな？

――「ゾウ！」

象、お鼻の長い体の大きな象さん、それから、その次に体の大きい熊さん。これはなにかな？

――「ウサギ！」

よく読めました、兎ですね。兎さんもいました。それからこれなんだろな。

――「タヌキ！」

狸ですね。狸さんもいました。それから猿がいました。さあ何匹いるか数えてみましょう。

――「イチ、ニイ、サン、シイ、ゴ！」

五匹いましたね。だれか五コといった人がいたけど、動物を数える時にはね、一匹、二匹、三匹、四匹、五匹と数えるんですよ、何匹いましたか？

――「ゴヒキ！」

そう五匹いましたね。この五匹の動物が森の中に仲良く住んでいました。

ある日のことです。誰だったか、兎さんかな「遠足に行こう、遠足に行こう」と言いました。みなさんも遠足に行ったね、この間。どこに行ったっけ。そう、動物自然公園に行きましたね。動物公園へ行って馬に乗った人もいるかな。

――「ハーイッ乗った！」

皆さんは、遠足に動物公園に行ったけれども、この動物達も「ぼく

達で遠足に行こう」――そう考えたんです。みんな「賛成、賛成」と言いました。でね、いっしょうけんめいにみんな、お弁当を用意し、リュックサックの中にそれを詰めて、そうして夜が明けるのを待ちました。

夜が明けると、さっそくこの森の動物村を後にして、森の後ろにはね、高い、なんだなこれは。

――「ヤマ！」

そう高い山があります。その山をみんなで元気よく、よいこらしょ、よいこらしょ、よいこらしょ、よいこらしょ、よいこらしょのよいこらしょってね、かけ声をかけながら越しました。山の向こうには、何でしょう、そう川が流れていたんです。その川をみんなで、また元気よく渡りました。じゃぼじゃぼじゃぼ、じゃぼじゃぼじゃぼ、じゃぼじゃぼじゃぼ、じゃぼじゃぼじゃぼと、元気よく川を渡りますと、向こう側は広い野原でした。

広い広い野原でした。「わあ、いいな、広い野原だ」――野原って知ってる？　どんなところか。きれいなお花が咲いていましたよ、蝶々も飛んでいましたよ。「わあいいなあ、ここでみんなで遊ぼう」。それでね、そこでリュックサックをおろしてね、何をして遊ぼう、そうだ、かくれんぼしよう、それでね、じゃんけんをしました。じゃんけんで負けたのが狸さんでした。狸さんがじゃんけんに負けて鬼になったんです。鬼になった人は目かくしをして、なんていうかな。

そう、「もういいかい」つて言いますね、狸さんは目かくしをして「もういいかい」と言いました。みんなは「まだだよ」と言いながらいっしょうけんめいになってみんな隠れました。そのうちに狸さんが「もういいかい」と言うと「もういいよ」と言ってね、隠れたので、狸さんはパッと目を開けて「さあ見つけてやるぞ」と言ってはりきりました。

ところが、はりきる間もなにもない。目を開けたらすぐ見つかった者がいます。なんでしょう、なんだと思う？　わからない？

――「ウサギ！」

兎さんは見つからない。熊さんでもない。

――「サル！」

猿でもない。

――「ゾウ！」

象、象ですよ。どうして象だということがわからなかったの？　象さんは大きな体をしてるでしょう。広い野原でも、象さんの体がすっぽり隠れるようなところはありません。一番大きな木の陰に、大きな体をできるだけ小さくして隠れましたが、隠れたのは、顔のところだけ。それも目のところだけ。大きな体はもう木の外にすべてはみでてまる見えでした。ですから、狸さんが。目を開けて見ると、すぐに、象さんの大きな体が見えたから「象さん見つけた、象さんの大きな体、木の向こう側にみんな見えてるんだよ」「ああそうか、残念だなあ」―象さんは出

てきました。

それからもう一人すぐに見つかった者がいます。

――「クマ！」

熊だと思う人、

――「ハーイッ」

そうよくあたりました。熊さんです。熊さんもいっしょうけんめい隠れたつもりですけれども、大きなお尻がまる見え。それで狸さんは「熊さーん見つけた、熊さんの顔は見えないけれども、大きなお尻がまる見えだよ」。

さあ、そこでね、狸さんは、「ようし、あと残ったのは兎さんと猿さんだな、見つけてやろう」――どちらが先に見つかったと思いますか？

――「ウサギ！」

そう兎さんでした。兎さんはね、体が小さくて木の陰にうまく隠れていましたけれどもね、耳が見えちゃったんです。その耳が、じっと隠れていればよかったのに、「狸さん、どこにいるかな」と木の陰からそっと顔を出してみたんです。目のところだけ出したつもりが、長い耳がにょっきり出たものだから、狸さんすぐ見つけてしまいました。「兎さん見つけた、長いお耳が見えたよ」。猿さんだけが見つからなかった。

さあ誰がこんど鬼になればいいのかな？　象です。なぜですか、象が鬼になるのは。そう、一番先に見つかったのは、象さんですね。一番先に見つかった者が鬼になるんです。それでこんどは象さんが鬼。象さんがおめめを隠して「もういいかい」「まだだよ」「もういいかい」

――「もういいよ」

こうしてかくれんぼをして遊びました。

そのうちお昼が近くなったんで、象さんが一番大きいから「みんな、お昼のおしたくにしよう」と、それでね、リュックサックを出してきて中からお弁当をとりだしてきて、むしゃむしゃむしゃとね、おいしそうに食べました。みなさんも、あの動物公園に行った時に、お弁当をたくさん持って行っておいしく食べたでしょう。象さん達も食べました。

そしてね、また遊んだんですけども、いつまでも遊んでいるとお家へ帰るのが大変遅くなってしまいます。途中で暗くなっては大変。「さあ、もうこのへんでおしまいにしましょう。みんな集まれ！」と象さんが大きな声を上げると、みんな集まってきました。「さあみんなそこへ並んで、みんなで五匹いるんだから、五匹いるかな、はい数えるよ」――象さん、数え始めます。「一匹、二匹、三匹、四匹、おや四匹しかいないぞ。ぼく達の仲間は五匹なのに四匹しかいないから一匹足りない。誰がいないんだろう」。

――「サル！」

猿がいない？　いや猿は一番こっちにいました。

――「ゾウ！」

象さんはいるじゃない、象さんが数えたんだから。兎さんもいました。熊さんもいました。猿さんが「ぼくに数えさせて」と言ってやってきました。象さんはみんなと一緒にそっちへ並んで、こんどは猿さんが数えます。

「一匹、二匹、三匹、四匹、あらほんとだ、四匹しかいない。象さんの言うように四匹しかいないぞ。誰が足りないんだろう」。

――「サルが入ってなーい！」

えっ、猿が自分を数えていない？　ほんとだ、そういえばお猿さん、自分を数えれば五匹だよね、ところが、自分を数えなかったの。象さんも数えなかった。猿さんも数えなかったの。他の人もかわるがわる出てきてね、数えるんだけどもみんな四匹しかいない。一匹たりない。誰だろういってね、首をかしげています。

その時です。ほら、この字なんていう字かな？

――「ハト！」

鳩という字だね、この鳩がお空を飛んでいましたけどね、ハタハタと降りてきました。

「みんな、何さわいでいるの？」と鳩が聞きました。「うん、ぼく達今、お家へ帰ろうと思って仲間を数えるんだけど、四匹しかいないの、一匹たりないのよ」

鳩さんはそれを見て「え！君達、五匹いるじゃないの、どうして四匹なんて言うの」――すると象さんは「鳩さん、ぼく達さっきいっしょうけんめいになって数えたんだけど四匹しかいなかったよ、鳩さん、五匹なんてウソでしょう」――そこで鳩さんは「みんなそこに並んでごらん、ぼく数えてあげるから」といって今度は鳩さんが数えました。

「一匹、二匹、三匹、四匹、五匹、ほうら五匹いるじゃないの」

あ、ほんとだ、鳩さんが数えたら五匹になった。おかしいなあ、でもさっきまでは誰が数えても四匹しかいなかったのに、でも皆さんはよくその訳がわかりましたね。やっぱり皆さんは、象さんや猿さんよりもりこうだね。それでね、鳩さんに数えてもらって、ああよかった。これで自分たち仲間はみんなそろった。安心してね、野原を後にして、川をじゃぼじゃぼじゃぼ、じゃぼじゃぼじゃぼ、じゃぼじゃぼじゃぼ、じゃぼじゃぼじゃぼと渡って、また山をよいこらしょ、よいこらしょ、よいこらしょ、よいこらしょ、よいこらしょのよいこらしょつてね、越えて、森のお家へ帰って行きました。とーてもみんな一日楽しくあばれまわったので、その晩はぐっすり眠れたそうです。

これで動物の遠足のお話はおしまい。（拍子）じゃあここで、出てきた字を読んでみようね。

森、象、熊、兎、狸、猿、山、川、野原、鬼、鳩、ハイッよくできました。